

新規加盟会員社紹介

本年4月より、ノボルディスクファーマ株式会社(昨年5月より準会員として活動に参加されている)、持田製薬株式会社および興和株式会社が新たに加盟されました。新薬メーカーとしてRAD-AR活動に協力されんとするご決断に敬意を表し、心から歓迎の意を表します。



ノボルディスクファーマ株式会社
代表取締役社長
ロジャー・モア 殿



持田製薬株式会社
代表取締役社長
渡辺 進 殿



興和株式会社
代表取締役社長
三輪 芳弘 殿

編集後記 2月18日にRAD-AR協議会の総会が開催され、平成9年度の新しいステップとでも言うべき方針が決議されました。意味深いことです。総会に出席された委員の方々には、内藤会長の「RAD-ARの灯よ、火焰となれ」という願いと、武市委員長長の知的で創造的事業を推進したいという平成9年度の事業方針を再認識していただき、出席されなかった委員の方々や会員企業の皆様には、本誌でその決意と願いをくみ取っていただきたい。RAD-ARは今、次のステップを歩もうとしています。RAD-AR活動の基本方針の一つである「くすりのしおり」は幾

つかのトライアルを経てCD-ROMの発売にこぎつけ、ようやくその成果を発揮しようとしています。もう一つの基本方針であるデータベースを利用した薬剤疫学的検討や海外情報文献の評価も着々と進行しています。

RAD-AR協議会は独立した事務所を持ち、「新しい活動の機軸となるNCPIE-JAPAN的組織の構想」も生まれました。これを機に皆様のRAD-ARへの積極的な活動参加とご支援をお願いする次第です。

(M)

RAD-AR(レーダー)って、な~に?

RAD-AR (Risk/benefit Assessment of Drugs-Analysis and Response の略称)とは、医薬品が本質的に持っているリスク(好ましくない作用など)とベネフィット(効能・効果や経済的便益など)を科学的に検証して分析を行い、その成果をもとにして社会に正しい情報を提供し、医薬品の適正使用を推進するとともに、患者の利益に貢献する一連の活動を意味します。

日本RAD-AR協議会は、わが国におけるRAD-AR活動の発展を図るために、国内の主要R&D型製薬会社によって1989年5月に結成された団体です。医学・医療・薬学・経済・統計など、各領域の専門家ならびに行政当局の協力を得て、薬剤疫学など医薬品の評価に関する研究から医薬品情報システムの研究、さらに医療担当者と患者とのコミュ

ニケーションの改善に資する情報提供に関する研究等、幅広い活動を行っています。

当協議会は創設当時、まったく知られていなかった「薬剤疫学」Pharmacoeconomicsについて、近い将来医療の重要な分野になると予測し、日本にそれを導入して、その進展を図ることを基本事業のひとつに選びました。さらにいまひとつ、インフォームド・コンセント時代を予測し、医薬品情報の正しいあり方を開発するというテーマも基本事業に組み込みました。

医薬品を創製・開発し、医療の場に提供している製薬企業としては、最新の科学を駆使して、自らそれら医薬品のベネフィットとリスクを検証し、安全性を最大に上げつつ、社会に正しい情報を提供し続ける基本的な義務があるという認

識のもとに、製薬企業は自主的にRAD-AR活動を推進していくべきであり、そういう活動のなかに当協議会の存在意義があると考えております。したがって、当協議会の通称も「くすりのリスク・ベネフィットを検証する会」としました。

RAD-AR News

Volume 8, No. 1 (Series No.22)

発行日: 1997年4月

発行: 日本RAD-AR協議会

〒103 東京都中央区日本橋

小伝馬町4-2 第23中央ビル5F

Tel:03 (3663) 8891 Fax:03 (3663) 8895

制作: 日本RAD-AR協議会

事務局エージェンツ

(株)ファーマ インターナショナル

〒171 東京都豊島区高田3-14-29

グレイスビル高田馬場6F

Tel:03 (5992) 6793 (直)・6300 (代)

Fax:03 (5992) 6261

RAD-AR News

くすりのリスク・ベネフィットを検証する会

April 1997
Volume 8, No.

RAD-AR

日本RAD-AR協議会 Series No.22

RAD-AR活動をささえる加盟社

(五十音順)

エーザイ株式会社 大塚製薬株式会社 小野薬品工業株式会社 キッセイ薬品工業株式会社 協和発酵工業株式会社 興和株式会社 三共株式会社 サンドバイオ株式会社
塩野義製薬株式会社 住友製薬株式会社 大正製薬株式会社 田辺製薬株式会社 第一製薬株式会社 大日本製薬株式会社 中外製薬株式会社 日本シエリング株式会社
日本新薬株式会社 日本チバガイギー株式会社 日本ヘキスト・マリオン・ルセル株式会社 日本ベーリンガー・インゲルハイム株式会社 日本モンサント株式会社 日本ロシュ株式会社
ノボルディスクファーマ株式会社 バイエル薬品株式会社 萬有製薬株式会社 ファイザー製薬株式会社 ファルマシア・アップジョン株式会社 藤沢薬品工業株式会社
明治製薬株式会社 持田製薬株式会社 山之内製薬株式会社 吉富製薬株式会社

第10回日本RAD-AR協議会定時総会

大いなる変革を包容する平成9年度の事業計画を承認

日本RAD-AR協議会第10回定時総会が、2月18日、東條会館(東京・千代田区麹町)で開催され、平成8年度の事業報告を承認したのち、創設以来9年ぶりに運営体制を変える、平成9年度の事業計画および同予算案を承認する、記念すべき総会になりました。

開会挨拶

日本RAD-AR協議会会長

内藤 祐次



RAD-ARの灯よ、火焰となれ!

いま、私どもの天職である製薬産業は、至上命令である「新薬づくり」を難しくするファクターにとりまかれており、環境はさらに厳しさを増すばかりに思える。それだけに、目に見えて儲かるとか、すぐさま利益が大きくなるものではないRAD-AR活動については、「喫緊の事業とは思えない」という声を聞くこともある。ただ将来を透視される賢明な皆様は、目の前の果実を収穫するエネルギーより、はるかに大きな活力を、遠利を計るために投入しなければ、製薬企業の繁栄が期し難いことは、十分ご承知のところと思う。

創設以来、私も日本RAD-AR協議会の基本事業の一つであるインフォームド・コンセント時代への賢明な対応策については、皆様のご援助のもとに生まれた「くすりのしおり」が、自治医科大、北里大学病院、舞鶴市民病院、川崎・横浜の保険薬局グループなどでのトライアルで、「極めて有効」というテスト結果が立証され、今春から当協議会の加盟社のほか、非加盟社の34社も含め、計64社の製品約650品目の「くすりのしおり」が、薬業時報社の手でCD-ROM化され、全国の医療機関がその医薬品情報を必要とするときに、いつでもパソコンで引き出して活用できる体制になるのは喜ばしい。正にこれは、当協議会の“世にさがける活動に存在を賭けよ!”—この方針が生み出した大きな成果であると思う。

いま一つの基本事業である薬剤疫学の分野では、医療の歴史がもたらすところもあって、まともなData Baseを一つも持っていないわが国では、欧米の如く、一朝にして薬剤疫学の大きな成果を得ることができないのは残念というほかない。ただ、その発展にとり組む宿命を背負ったわれわれが、今ここで諦めてしまえば、欧米では常識である「医療の記録を活用する薬剤疫学活動」が、わが国ではもはや半永久的に開花できなくなってしまうのを見過ごすことはできない。それだけに、わがRAD-ARが追求する薬剤疫学の主軸事業の一つであるデータベース構築の灯は、断じて消してはならぬと信ずるのである。それとともに、

薬剤疫学の類縁的活動、例えば常時発表される世界の文献に目を配り、適切な解説を要するものは逸早く解析して、正しい情報を会員社やジャーナリズムに提供するほか、不備はあっても、規模の大きな病院等が保有するDataを使って解析技術に習熟し、その機会に「Data Baseを改善するための方策」を提案する等、地味ながらも、医療の世界に貴重な貢献をもたらすテーマにとり組んでくれることを願ってやまない。ともあれわれわれのRAD-AR活動は、「最も科学的な医薬品の適正使用を実現する最大の切り札」として標榜するものである。

以上の如く、二つの大きな基本事業に努力してきた日本RAD-AR協議会は、孤々の声を上げて満8年を閲した。しかも私はこの8年間、毀誉褒貶に耐えながら会長の職にあり続けた。しかし、昨年3月の総会において、平成8年度中に、私が提供している事務所を出て新事務所に移り、私と、私を補佐してきた運営委員長の二人は、平成9年度に畏敬する次代の方にバトンを渡すという約束が決議されている。本日の総会では、それがどこまで進行しているか、皆様にご報告してご検分願うのが最大のテーマであろうと思う。

何卒皆様のご賢解をもってRAD-ARの今後の進展に大きな光が与えられ、今、リスクな話題にとりまかれているわが国の医療や医薬品の領域で“RAD-ARの灯”が“RAD-ARの火焰”になることを願ひて、ご挨拶といたしたい。

知的エネルギーを動員して、医療レベルの向上に寄与したい

運営委員長

武市 匡豊



'97年(平成9年)は、日本RAD-AR協議会(RCJ)にとって特筆すべき年になるのは明らかな事実である。'88年、志を同じくする数カ国(イギリス、ドイツ、オランダ、ギリシャ、オーストラリア等)の大手製薬企業が、医薬品が宿命的に持っているリスクやベネフィット等、薬の本質を正しく社会に理解してもらうためには、「RAD-AR活動を展開する必要がある」と痛感して、各国ほぼ同時に、同じような活動を開始した。爾来、本年で8年を迎える。今、前述した国の現状を点検してみると、RAD-AR活動の形骸的なものを残している国はあっても、わが国のように大手製薬企業30余社が、創設時の志を阻喪することなく、情熱を傾けて所期の活動を継続している事例は全くなく、例外中の例外といえる日本の活動は奇蹟だと評価される次第である。

ただそのRCJにも、漸く歴史の転換期が来た。現在の執行部がいかに真摯的であり、その努力がすばらしく創造的であろうとも、適切な機を得てローテーションを行うことが、「健なる天行」の教えるところであると認識し、ここ2~3年、その準備を急いできた。かくて昨年3月の第9回総会において、「長年無償で面倒を見てもらうという、大恩を受けた内藤会長の虎ノ

門の事務所を出て、自前のオフィスを開設し、誰でも会長や運営委員長ができる体制を整備すべし」という決議が行われたのである。

ローテーションの準備に懸命の努力

それだけに平成8年度の活動は、一つのアイディアが医療の場で大きな役割を果たすことになった「くすりのしおり」の仕上げ工作と併行して、財政の安定と創造的な事業を前向きに推進する構想の策定に全力を集中したといっても過言ではない。新事務所は別項で示すとおり、適切なところに適当なものを開設したが、これまで無償で使わせてもらっていた事務所の維持運営に、今後は大きな経費を自ら負担するために、窮屈になる財政下で、創造的な事業にとり組めるよう、探索の志向を集中してきた。その結果、われわれが思い定めた事業の機軸は、次のようなものである。

1) 薬剤疫学の関連領域では、以下のような志向をもつ活動に取り組む。

a. いま、わが国の開発臨床活動は空洞化してしまうのではないかと、という危機の声さえ聞える。そのようななかで、いま一つ、大きな意欲を持って取り組まなければ実現できない重大なテーマが、手つかずのまま存在している。それは、医療行為の記録を精密に標準化してデータベースを構築し、その解析を通じて医薬品のリスクやベネフィットを検証し、医療の効率を最高に高める構想である。私はこのテーマを等閑に付すことは、わが国の医療レベルを守る上から絶対に許されないことだと思う。おのずから

このテーマをRCJ不変の目標として掲げることは言を待たない。

b. ただ、現段階では、以上のように整備されたデータベースを一本も持たないばかりか、その必要性への認識さえ乏しいわが国においては、この領域から一朝にして大きな成果を求めることはできないのは当然である。おのずから現在は、小規模ながらも価値あるテーマの実験と検証が事業対象とならざるを得ない。例えば現在、関東通信病院と協同行っている実験(別掲)や、世界の一流医学誌に掲載される重要な文献を適正に解析して会員社やジャーナリズムに正しい情報として提供することは、価値ある「類縁的活動」として貴重といえる。

2) コミュニケーション領域では、以下のような志向をもつ活動に取り組む。

RAD-AR活動の目指すところは「医薬品の適正使用」に尽きる。その意味よりすれば、RAD-AR活動を製薬企業だけのものとはせず、社会の各方面に参加を求め、社会各層に支えられるRAD-ARであり、「広く社会に支えられる適正使用」を企図するため、NCPIE-JAPAN(National Council on Patient Information and Education-Japan)的な組織づくりを構想し、「コミュニケーション活動の汎社会的拡大」を企図したい。知的エネルギーの活用を最大限に拡大し、この斬新な構想を成功させたい。



実行可能なテーマで存在価値を高めたい

薬剤疫学部会

部会長 真山 武志



薬剤疫学部会の活動は、わが国に薬剤疫学を普及・定着させ、そのベースに支えられて、医療の場における薬剤の安全性と有効性を検証しながら、科学的に適正使用の推進を図るのが最大の目的といえる。薬剤疫学研究のためには、医療記録を標準化するとともに、正しく入力されたデータベースが必須となる。わが国の場合、まだまだそれへの道程は遠いが、現在は、各大学病院等のデータベースを利用した研究、海外で発表された薬剤疫学論文の解析・評価、薬剤疫学セミナーの開催等によって、一步一步着実に目標に近づくことを企図している。以下に主な活動について述べる。

<事業計画>

1. 大学病院等のデータベースによる薬剤疫学研究

前年度、鹿児島大学病院データベース(THINK)を用いた「術前抗生剤投与の有効性」の研究を実施して、既存のデータベースを用いた薬剤疫学研究上の問題点を明らかにし、第2回薬剤疫学研究会で発表した。規模はともかく、本格的な薬剤疫学研究における手法の実験として、各方面から好評を得、関心が持たれた。このように、既存のデータベースによる薬剤疫学研

究のトライアルは、薬剤疫学研究のための入力項目、標準化等の課題を明確にし、今後におけるデータベース構築の一助になる便益を得た。さらに、この成果を関係学会(国際薬剤疫学会等)でも発表し、薬剤の適正使用の推進に結びつけていきたい。

●鹿児島大学病院データベース

「薬剤と間質性肺炎」、「高血圧患者で糖尿病を併発している患者へのACE阻害薬投与による低血糖」、「老人性関節炎とNSAIDsによる胃腸障害」のテーマでトライアルを実施する。それぞれのテーマについて、データベースにどのくらいの患者数が入力されているか、追跡する方法等の検討から開始する。使用実態調査から入り、そこから適正使用への道を探索する。

●関東通信病院データベース

前年度に引き続き「長期降圧薬治療における心血管性合併症ならびに偶発症に関する研究」をテーマにトライアルを実施する。本研究は、現在高血圧患者のリストアップとデータ解析のためのソフト作成が終了しつつある。使用された降圧薬と心血管性合併症ならびに偶発症発症との関係を明らかにするものである。

2. 海外情報研究会

前年度から開始した活動であり、重要な活動として位置付けられる。JAMA、LANCET、New England Journal of Medicine等世界的な医学誌に発表された薬剤疫学論文を専門家(薬剤疫学研究部会会長楠先生等)と一緒に精査し、解析・評価を行うものである。前年度は「降圧薬使用に伴う心筋梗塞の危険性」等について実施し、薬剤疫学研究の結果だけがストレートにマスメディアにより公衆に伝えられることに問題があることを指摘した。

今後も薬剤疫学研究の真の目的を明確化するため、話題となっている論文について行う。その結果を各方面にフィードバックする。

●経口避妊薬と静脈血栓症等

「経口避妊薬と心血管性疾患」について、薬剤疫学研究は数多く発表されている。海外で上市されている経口避妊薬の医師用・服用者用の添付文書には、その危険性が記載されている。既に薬剤疫学研究の成果として、対応に反映された事例の一つである。しかし、最近第三世代経口避妊薬がさらにその危険性が高いことが発表され、国際薬剤疫学会議でも討論された。周辺論文も含め、解析・評価を進める。その他にも、本研究会の目的に沿った薬剤疫学論文について引き続き実施する。

3. 薬剤疫学セミナー

医療機関の先生方、特に病院薬剤師が、現場で薬剤疫学を試行するための要件を理解し、将来の薬剤疫学研究に役立つ知識を修得してもらうことが主な目的である。最近になって会員社内の関係者からもかなり濃密な薬剤疫学セミナーの実施について要望が上がっている。今後、企業も当然薬剤疫学の活動が求められる。このような状況から、本年度は病院薬剤師等医療関係者を対象としたセミナーを東京で開催し、さらに会員社を対象にインテンシブコースを開催すべく企画する。

活動の場を広げ、価値あるインフォームド・コンセントを

コミュニケーション部会

部会長 和田 有一



平成8年度の事業の中で特記的なことは、学習院大学法学部教授田中靖政先生を座長とする「ファーマコミュニケーション研究会」において、「くすりのしおり」のトライアル結果を多面的に再評価した結果、その有用性が評価され、早期実用化を推進するようにとの提言を受けた。

平成9年度は、コミュニケーション活動の中心的機軸を「インフォームド・コンセント時代に対応する活性的な情報活動の開発」を主眼において活動する。

<事業計画>

1. RAD-ARへの参加者の輪を拡大する

RAD-AR活動の本質に立脚して、患者さんは勿論のこと、社会の各領域からRAD-ARに参加いただき、「医薬品の適正使用」を推進する仕組みづくりを研究する。具体的には、仮称「NCPIE-Japan」(※National Council on Patient Information and Education-Japan—患者への医薬品情報提供と教育に関する協議会)的な集団の創設を目的として、その関連研究を開始しようとするものである。したがって、会員資格も従来は製薬企業に限定していたものを改定し、参加団体を社会各領域に広げて、斬新なインフォームド・

ド・コンセント構想を追究していくことになる。

2. シンポジウムの開催

インフォームド・コンセントに関するフィロソフィとガイドラインの探索や、さらにその実用化を志向するシンポジウムを、医師や薬剤師の団体と協力し、前年に引き続いて開催する。

3. 「くすりのしおり」CD-ROM化以後のフォローアップ

「くすりのしおり」のCD-ROM版は5月中にも薬業時報社から発売されるが、使用者の便宜を図るため、収載品目数の拡大や、添付文書記載内容の変更等に伴うメンテナンス等のフォローアップを継続的に実施する。

4. インターネットによる国内外の情報との積極的交流

昨年11月、インターネットにRCJのホームページを開設した。薬剤疫学と「くすりのしおり」に関する意見や論文、さらに感想等を自由に交換してもらうための広場としての電子会議室を充実するとともに、海外からのアクセスができるように内容の英文化も検討する。ちなみに「くすりのしおり」閲覧のためのID番号請求者は、3月25日現在245名に達している。

5. 患者向けカード(RAD-ARカード)の制作

RAD-ARカードは過去6回発行し、延べ印刷枚数は1,040万部に及ぶが、好評であるので今年度も発行する。発行方法

は昨年度同様、企画段階まではRCJで行い、印刷経費は会員企業負担による企業協賛方式で行う。

6. 定期刊行物の発行

①RAD-AR NEWSの発行

会員会社、医療担当者、ジャーナリスト、行政を対象にRAD-AR活動を広く適時に紹介するため、1回9,500部、年4回発行する。

②RAD-AR FORUM

従来、医療関係者を対象にRAD-ARの事業活動の紹介と、患者向け医薬品情報の重要性についての啓発広告を医家専門誌に出稿してきたが、今年度からはパブリシティ的要素を加味したニュースリリースを適時、医家専門紙・誌を対象に発表していく。

※NCPIEとは患者への医薬品情報についての教育の問題を扱っている協議会で、非営利団体である。組織を構成する会員は、医療の専門家、消費者、医療機関、製薬企業、行政、その他の医療関連団体である。この協議会は、処方医薬品について、医療専門家と患者との対話を向上させるため、1982年に創設され、その目的は患者が処方薬について十分に情報が提供され、治療に積極的に参加し効果的な治療を実現することにある。



<日本病院薬剤師会>

会長 斎藤 俊也氏
常任顧問 高橋 則行氏

<RAD-AR委託研究会>

東京大学医学部教授 大橋 靖雄氏
鈴鹿医療科学技術大学医工学部医情報工学科教授 坂部 長正氏
東京大学医学部附属病院病院将来計画推進室 折井 孝男氏
学習院大学法学部教授 田中 靖政氏
千葉大学薬学部教授 山崎 幹夫氏
(財)ヒューマンサイエンス振興財団専務理事 海老原 格氏
北里大学病院薬剤部医薬品情報センター係長 望月 真弓氏
帝京大学薬学部医薬情報研究室施設医薬情報室 堀 美智子氏

<アメリカ・カナダ調査団関係>

関東通信病院薬剤部長 小宅 正氏
関東通信病院薬剤部医薬情報室長 橋本ひろ美氏
NTTデータ通信株式会社 岡田 英樹氏

<IMBRF関係>

慶應義塾大学医学部名誉教授 本間 光夫氏

<日本製薬工業協会>

医薬品規制・ハーモナイゼーション推進国際共同研究推進事業事務局 遠山 隆之氏

<東京医薬品工業協会>

理事長 斎藤 勲氏

<自治医科大学附属病院関係>

主任薬剤師 山崎 晶司氏

<アドバイザリーボード関係>

アイデアフォー 塩谷 博子氏
アイデアフォー ゴールドバーグ 君子氏
アイデアフォー (コサリーベルマン(株)) 岩崎 公美氏

<その他>

新潟薬科大学学長 池川 信夫氏
日本医薬情報センター理事長 三宅 浩之氏
医療科学研究所専務理事 平工 昭夫氏
慶應義塾大学医学部教授 北澤 式文氏
衆議院議員(民主党厚生部会長) 五島 正規氏
衆議院議員(民主党政調会長) 仙谷 由人氏

<メディア関係>

読売新聞解説部次長 水巻 中正氏
産経新聞論説委員 岩淵 勝好氏
ほか、本町記者クラブ所属記者11名各位

来賓ご挨拶

日本病院薬剤師会会長

斎藤 俊也 殿



協同し合える良き関係に

ご存じのように薬剤師法が改正されまして、4月から薬剤師は調剤した薬についての情報を患者さん、あるいは看護に当たる方々に提供する義務があると、はっきりと法律上明記されました。現在、病院・診療所の薬剤師ばかりではなくて薬剤師すべてが、よい情報をどのように患者さんのために提供したらいいか、必死になっているところですが、折も折とて、先ほど会長からお話が

ありました通り、「くすりのしおり」がCD-ROMで発売されるということで、我々にとって素晴らしいツールになるのではないかと期待しております。願わくば、そこにはより多くの会社の、より多くの情報が盛り込まれ、薬の使い方が一層よい方向に進んでいくようにご支援をよろしくお願いしたいと思います。



日本チバガイギー株式会社 代表取締役社長

P. ドゥドラー 殿



切に、切に発展を祈りたい

私は今回の総会に出席させていただき、3つのことに非常に感銘を受けました。1つ目は内藤会長および武市運営委員長のご指導のもとにRAD-ARはこの数年間になんと素晴らしい発展を遂げることができたかという点です。2つ目は予算です。非常に少ない予算の中で、これほど多くの事業を立派にこなしてきたRAD-ARの実績というものに非

常に感銘を受けました。3つ目に事務所の移転ですが、新しいオフィスに移るということは、このRAD-ARが子供の時代を抜け出して、立派に成人した段階に達したということが言えるのではないかと思います。

そして今後も、これまでと同じように、パイオニアスピリットに満ちた活動をRAD-AR協議会が続けていかれますように、そして素晴らしい実績を残していくことができますようにと祈念しております。また、内藤様、武市様のこれまでのご苦勞に対して深く感謝を申し上げます。

衆議院議員

仙谷 由人 殿



目先の利益に迷わない努力に敬服

民主党で政策調査会を担当している仙谷でございます。

日本RAD-AR協議会の目的が目先の利益にとらわれずに、インフォームド・コンセント時代の医薬品情報ということから薬の持つ有用性、有益性についてきちんとした情報の収集、蓄積、管理をする、そのことが薬剤疫学につながるというコンセプトで活動していると思っています。これは、本当にこれからの時代では一番大事なことだと思います。

今の日本に一番必要なことは、実態を国民の皆さんに開示するという事です。国民はそれを判断し、再構築するという能力を十二分に備えていると私は確信し

ます。行政改革は正に市民、企業にとっての行政改革でなければなりません。その前提として、情報を国会で国民の前に明らかにする。今まで好き勝手にやってきたという構造を、何とか突き崩したいという思いで頑張っています。今後ともご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

衆議院議員

五島 正規 殿



時は正にRAD-ARに期待する

民主党の厚生部会長を担当しています五島でございます。

今、医療保険問題が議論されています。その中で極めて皆さんにとってお腹立ちとは思いますが、私は敢えてもう薬価基準制度をなくしたらと主張しているところなんです。とはいっても、現実問題として何らかの社会的規制は必要なんです。薬価基準制度をなくしてしまうことにはなかなかないだろうと思います。いずれにしても医療保険問題を議論する時に、国民的コンセプトとして薬価問題を外して議論することができないのは明らかであります。これまで薬価基準制度の中で進められた医薬品の供給体制を新たにどういうシステムに組み直すのか、基本的に考えなければいけない時代に入ったと思います。一方、新たな伝染病や疾病に対する研究開発も日本にとって重要な問題です。

日本RAD-AR協議会が、8年間に

及んで活躍を続けてこられた大変なご苦勞に対し、心から敬意を表したいと思います。

日本医薬情報センター理事長

三宅 浩之 殿



21世紀、RAD-ARに期待したい

日本の医薬品に関する問題が非常に賑やかにマスコミにも取り上げられていますが、実際には医師や薬剤師が困っているわけです。我々としては情報提供をする義務があるという状況になってきました。今回、このRAD-AR協議会の総会に当たりましてご招待いただいたのも、そういう意味で、これからの21世紀は情報の世紀であるというふうに理解しまして、喜んで参上いたしました。JAPIC(日本医薬情報センター)もまだ大きな団体ではございませんが、大勢の人間もおります。そして製薬会社の会員の方々にも支えられており、今後お役に立てるというふうに考えております。幸い、コンピュータ化もだいぶ進んでまいりまして、データベース、いわゆる電子ベースの情報というのが今後21世紀を支配するのではないかと思います。したがって、このRAD-AR協議会のパワーが非常に期待されていると考えられます。

皆さんのご協力、そしてご努力によって、RAD-AR協議会がますます栄えることを祈念いたしまして私のご挨拶といたします。

さきがけ活動が結実! 「くすりのしおり」CD-ROM第1版いよいよ発売

「くすりのしおり」は、各位のご協力により、知名度も上がり、また、4月1日からの薬剤師法の改正もあって各方面から大きな関心が寄せられています。

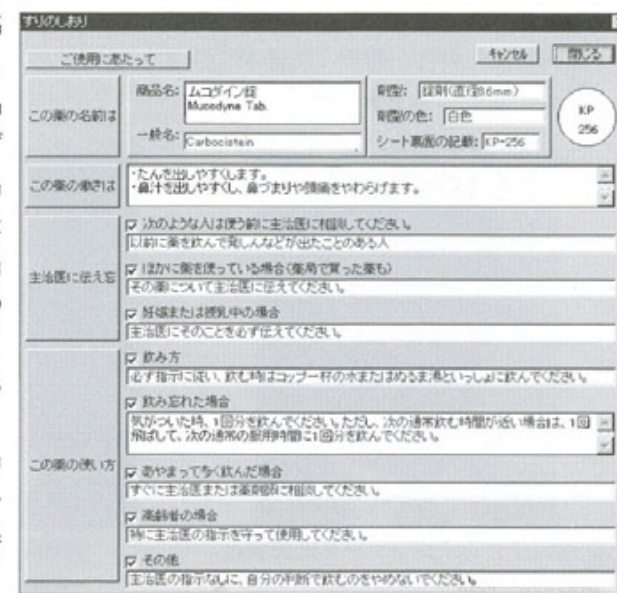
医療現場での利便性と、ファーマコミュニケーション研究会の提言に沿う形でCD-ROM化を進めてきましたが、今回薬業時報社が商品化と販売を一括して引き受けて下さり、いよいよ発売されることになりました。

当初は、4月1日に間に合うように計画したのですが、原稿の集まりやソフト制作に予想以上の時間がかかり、大変残念ですが、発売は5月中旬になります。

「くすりのしおり」は64社からご提供い

ただしました648銘柄、1,352規格が、添付文書は約1万品目が収録され、いずれも銘柄名と一般名で検索できます。また「くすりのしおり」は当然、医師や薬剤師の方針に基づいて書き換えができる機能があります。

価格は現在検討中ですが、普及しやすい価格設定をと折衝しています。



RCJ海外情報研究会活動報告 情報とフィロソフィだけでも価値あるRCJになろう!

昨年、薬剤疫学に関する研究に端を発したCa拮抗薬の安全性問題が、専門誌だけでなく、米国の一般誌にも大きく取り上げられ、多数のCa拮抗薬服用患者にパニックをもたらせ、社会的に大きな波紋を呼びました。本研究会は、薬剤疫学研究成果を学術的に正しく掌握してその手法を学び、薬剤疫学の日本に於ける振興と普及を志向しております。また、それとともに、米国でみられたような、医療の混乱を未然に防止すべきであるとの認識のもとに、昨年4月に設置された研究会であります。爾來、

約1年間、幸いにもこの領域の権威者である日本薬剤疫学研究会の楠先生と、国立公衆衛生院の藤田先生の懇切なご指導とご援助を得て、順調に活動を続けております。既に、昨年末には、冒頭に述べた問題の文献を含め、Ca拮抗薬に関する5つの論文についての評価研究を行い、その成果を会員社の皆様にお届けすることができました。現在は、Ca拮抗薬同様、欧米で盛んに研究発表が行われている経口避妊薬の安全性に関する多数の論文について、評価研究を行っております。この間

題も、Ca拮抗薬同様、特にヨーロッパにおいては社会的論争にまで進展しています。われわれとしては、これら薬剤疫学に関する研究、すなわち、観察的研究の意義と限界も見極めた上で、マスメディアへの正しい情報の提供にも十分配慮する活動も、当研究会の重要な任務だと考えております。また、今後の活動としては、これらの論文を題材とした会員社の方々のための研修会の開催も企画しており、その折には関係者各位の多数ご参加を期待しております。

(小委員長 福島 宏)

事務局が新しい事務所へ移転 意義深い8年—虎ノ門に深謝

事務局自立の一環として、これまで無償で間借りしていた虎ノ門内藤事務所にお別れして、新しい自前の事務所へ移り、4月1日より業務を開始しました。

新しい事務所(中央区日本橋小伝馬町4-2)は、地下鉄日比谷線小伝馬町駅から徒歩5分の所にある第23中央ビルの5階です。30人収容の会議室があり、RCJの各種会議への利用が可能です。折角ご利用下さい。なお最後に皆様ともども、内藤事務所に心からお礼を申し上げます。

